續後撰和歌集
上

特別
へ4
8099
10(1)

ヘ4
8099
10
(1)

〈2001-024〉

早稲田文庫

續後撰和歌集巻第一

春歌上

年内に春たちける日よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

としのうちに春立ぬとや吉野山かすみかゝれる嶺の白雲

承暦二年内裏後番歌合に霞をよみ侍りける

前中納言匡房

葛木やたかまの山の朝霞春とともにも立にけるかな

天暦御時麗景殿の女御の歌合に

壬生忠見

浅緑春はきぬとやみよしのの山のかすみの色にみゆらん

後法性寺入道前関白右大臣に侍りける時家に百首歌よみ侍りけるによみて侍りける春のうた

後徳大寺左大臣

久方のあまのかく山てらす日のかすみてしるき光の春のけしきを

鎌倉右大臣

朝霞たてるを見れはみつのえの吉野の宮に春はきにけり

正治二年後鳥羽院に百首歌たてまつりけるに春のはしめの歌

後京極摂政前太政大臣

久方の雲井に春の立ぬる道はそらにそしるき天のかく山

道助法親王家に五十首哥よみ侍りける初春の心を

参議雅経

元ゝの海の浦のいそゝの昔よりはしまるとも春はきにけり

題不知

後鳥羽院御製

さゝ浪の志かの山路は春すかて峯の雪気は野辺もとへかん

百首哥よみ侍りける中に

入道前摂政左大臣

春くれは雪のしたにこほりきのかけのかよひも霞たちけり

位にあまりくれ時くれをつこすも髭をはらひて

今朝はまつおりはいてそ霞を

太上天皇

敷嶋やきまたをさき朝霞のとかにてそ春は来にける

人〃に十首哥召侍しに

幾代をかさぬる春のはしめとそいよゝまつあをみに

前太政大臣

わきを見れは千種にもみえかさねきに春に霞かゝる

道助法親王家の五十首の中に初春

西園寺入道前太政大臣

立そむる霞の衣うすくれと春きそてにみゆる方の山の端

寛平の御時きさいの宮の歌合哥

よみ人しらず

みつて春立ぬともみよしのゝ吉野の瀧のをとゝきはなる

麗景殿の女御の屏風に

紀貫之

浅緑春の川そうにほひともれの緑をまさる人はあらなむ

題不知

よみ人しらず

冬されて春立ぬとも華もなし山にも野にも鶯なかなく

うくひすのなきぬるも吉野の霞は衣今は立らん

百首哥よませ給ふ中に鶯

土御門院御製

雪の中に春はありともつけなくにまつしる物は鶯の声

建保四年百首哥奉りける時春哥中に

入道前摂政左大臣

うちきらし猶風さえて磯の神ふるの山への雪はなほさむ

早春霞といへるこゝろを

嘉陽門院越前

佐保姫の衣春風なほさえてかすみの袖にあは雪そふる

春哥の中に

西行法師

かすまずはなにかは春とおもはましまた雪きえぬみよしのゝ山

延喜十四年四宮乃屏風に　貫之

山里ハ雪そまたふる春霞いたちもて立渡る華

天徳四年内裏哥合に　平兼盛

ちるさとの雪を消ぬと梅かえにけさ鶯そ春とつくなる

題しらす　伊勢

梅花かをさへにほふ（春立てあかぬ雪にもまさるらむ

鎌倉右大臣

むかしみし花の色ハそれなから風にみたれて雪ハふりつつ

建仁元年五十首哥たてまつりし時　前中納言定家

ちるさとてふかくさそひし梅花ちるの里の春たにあハ雪

建保四年内裏百番哥合に　順徳院御製

あハ雪ハ消なとて花とかきそこかしこの梅か枝に春の梅かえ

参議雅経

かたらんとゆく日数ハそこにけるふるの里の春たにあハ雪

残雪のころを　後鳥羽院御製

垣根乃春たにとやつもる雪の名残乃若菜つむらんゆき

堀河院御時百首哥たてまつりけるに

藤原基俊

春の日のながくなりてもかゝきしにはまつ雪きえてなにはなるらん

久安六年崇徳院に百首哥たてまつりける時若菜をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

かたみさら雪もきえぬやこゝらしのゝ見ゆる原に若菜つみてん
おもしろきを

土御門院御製

白妙の袖にまかひてふる雪もきえぬ野原にわかなをそつむ

建保四年百首哥の中に

入道前摂政左大臣

霞しくたきのやまとのわかえてまつたぬ春のきたれるかな

麗景殿の女御の哥合に

平兼盛

みよしのはひらの山の雪消てかすみつゝく野はかすみけり

大原野の社にまいりてよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

春霞立にけらしなをしほ山小松か原のうすみとりなる

春哥中に

法性寺入道前関白太政大臣

津の国のあしの橋のあさなきにかすみそたちわたりける

天暦の御時の屏風にすまの浦に霞たてるところを

こ見給ける　　大納言延光

よ海山のさかのかすみや煙なるらん霧の衣をしるらん

題不知　　後鳥羽院御製

見渡せはいなさのかすみはかすかにもよそにかすみなかすみよゝうけの浪

後法性寺入道前関白太政大臣

あさえ方に飛かふ春霞たちかへる浦のなみかく見え

土御門院御製

伊勢の海あまのもしほ湖霞たつしほかせにかすむ雁とこそみ

建長二年詩歌を合せられ侍しに江上春望（河）

参議為氏

人こゝろ見えすやいそんに津鳴すむ入江の春の明ほの

洞院攝政家百首歌に霞

正三位知家

三熊野の浦のはまゆふいくへとも春をかさねてかすむとこそね

和歌所にて釋阿に九十賀給はせける時の屏風に

後京極攝政前太政大臣

春霞しのゝ衣をおりかけていく日ほすらんあまのかく山

春歌中に　　源重之

よ海立て霞やへぬんしもみ末の山のすそにいろそのしるゝゆらく

題しらす　　柿本人麿

あはれやきのふくるはすくなるまで世にゐてもかくらぬ鶯の聲

中納言家持

青柳の糸よりかけて春風のミたれぬさきにみん人もかな

藤原基俊

春風はふけとみえけりわきもこかかたみにかくる青柳の糸

道助法親王家の五十首哥に春柳

西園寺入道前太政大臣

春雨も世にふるさとの柳かけみとりにまさる浪の下草

天暦の時梅に鶯の巣つくりたりけるをほりとらせ給ける

中務

うくひすのつまるやとは梅花をこそ色まて人ハこととはめ

題不知

中納言兼輔

花とちる雪はふりせは梅花色のみかはにかをそとめまし

紅梅を折て中納言兼輔によせける

参議玄上

色の香のあかぬハ折やとも梅花とこそいはめ紅のなき

春宮中務

権中納言定頼

梅花折袖の香にほふにもあかぬ人をそ恋ん

妙願法師

春の雪にさくハまつ梅花もえにしにかけてやみえしと

従二位家隆

もゝしきや大宮人乃袖のうへにかさねてまかふ花乃梅かえ

建長元年二月前太政大臣乃家に行幸ありて

むかし内裏にたてられたるこゝろの梅花さかりなりけれは

よしありめして人々してむすひにたてまつる

太上天皇

色も香もかさねてにほへ梅花こゝのへ乃庭にうつしては

凝華舎乃梅さかりなりけるにまゐりて侍りける

前太政大臣

あくまてもちりにし庭の梅花いく代乃春をにほひきぬらん

續後撰和歌集巻第二

春哥中

帰雁を

菅贈太政大臣

雁かねの秋なくことはことはりそかへる春さへなにかかなしき

恒徳公の家の歌合によみ侍りける

藤原惟成

いくとせの年をか雲にあのいくらの春にかへる雁かね

百首哥奉りし時帰雁

入道二品親王道助

あけぬるかこし山こゆる横雲にいく雁かねのくもる曙

前太政大臣

ゆくすゑをたのめし雁もとこよにていつ秋とてか春を別る

前大納言基良

しのゝめの霞の衣きぬ〳〵にたちわかれてや雁のかへらむ

春哥中に

前内大臣家

ほのかなる霞につきてきえはてゝほのかにきこゆ春の雁かね

右近中将雅忠

おほつかなかすみにつけて雁のゆくへをみをくりし越路の空

春雨を

前関白左大臣

いつまてか見ぬ世をしのふ春雨にぬれ〳〵のみや袖はぬれつゝ

野春雨といふことを

権中納言長方

日にそへて緑そまさる春雨にむかしをかけて道はしられき
ぬらし哉

前内大臣家

行思ふ朝の原も霞みえて草ハみとりの春雨そ降る

後鳥羽院御製

霞さらまの先ハ春雨ふる里のこゝろに花も今やさくらん

洞院摂政家百首歌に花

前大納言為家

あすもやる和山かけ桜よの程に花そさきぬかかる白雲

千五百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

山桜今のいくかの春ならむゆきの春日は遠き外山の白雲

花歌中に

参議為氏

花を見しこのかみ山の桜さきよもの神山かかるしら雲

土御門院御製

みよし野ハ松もむかしに数そひて有明の山桜さくよもの山も

正三位季経

さらぬまに花かとみえし白雲にまたしらぬ山そかゝれる

鳥羽院御時毎朝見花といふ心をよませ給ける

三條内大臣

春霞こきてのわしつるはさかく花のく嶺よりおつる雪

後京極摂政家五十首哥の中に

前中納言定家

桜花さきにし日より吉野山空もひとつにかゝる白雲

入道前摂政家の哥合に雲間花

従三位範宗

山のはにかさねてかゝる白雲はみよしのや花のさかりなるらん

藤原隆祐朝臣

ゆくさきはそらにしのゝめの白雲のあさひにほひかゝる本山

春哥中に

大納言通方

佐保姫の花色ころも春越へて霞の袖ににほふ山風

十首哥合に山花

太上天皇

見ても猶あくよそ桜さかりなる吉野の山の花さかりかな

花さかりに西園寺にすみ侍りけるに人々まうて来て哥よみ侍りに

前太政大臣

おさまれる世のためしとて山里に色のけしきの花とみる哉

久安百首哥たてまつりける時花哥

待賢門院堀河

花さかぬこすゑは春のしるしとて桜をかさしてなれる霞

上西門院兵衛

多つね行山邊にかゝる白雲乃きえぬかきりハさくらなりけり

建保四年内裏百首うた合よ

二條院讃岐

山人乃春まちかねつる心かれ雲井乃花よそのミすきて

讀不知

前大納言公任

まつ人乃こぬ宿乃庭まくやと花ハふゝこそとりの風なれ

和泉式部

花よりの心をミせとのかゝる言ハおとしたり名を立ぬへき

たゝ是て春の桜よりも心をちらてふたゝひちかつなり

壬生忠峯

おもしろき庭乃櫻ハ散りかふて世そ花よまつかたのかめ

人麿

春霞立まよふ山とみえけるハさくらもつのそれちらまかな

菅贈太政大臣

ちる桜てもふりみえつる一えたハものうき孫の花そあらなる

亭子院哥合よ

藤原興風

見てかへる心あかねハ桜花さきかりにやまかもしり

凡河内躬恒

みかくてもおもひて花まかせなくちりかハ風よや花をまちせそかん

正治百首うた合よまつりかり

皇太后宮大夫俊成

おしなへて吉野の山の花ならや雲に桜をさへたつらん

和歌所にて釈阿に九十賀たまはせける時屏
風に

前大納言忠良

よ経てそは花のみるをしつくゑやかそそむる筆の跡さへ

百首歌毎てまつりし時見花といふ心を

前太政大臣

今そ又花をし重ては世の人の心そ身にしられける

翫花

かゝしてはかくそ花とをちかへりてそたとへはゆきし山桜かな

宝治元年三月前太政大臣西園寺の家に行幸
ありて花の色を久しといへる事を人々つかうまつりける

後土御門内大臣

おしなへて花の木毎に桜代にそへてちよまていはふよにちきれよ

花の宴中に

正三位知家

春をへて花をしいれはこはれぬれはこそさかりに見えてちるは

従三位頼政

ちる花をなれいそいてみのかはらのみやまにて花桜かな

藤原資宗朝臣

春ならは花もやとらん旅人の山桜のみ咲てをしまるゝ

春日社にて名所十首哥人〳〵すゝめてよませ侍
りける比花を　権僧正円經

咲にけり奈良のみやこは年ふりてしらぬ山にも色をそへける

故郷花といふ事を　如願法師

とふ人もあはれいくよの古の里にあまたゝ咲花の色

おなしこゝろを　祝部成茂

代々へぬる春賀の都のあとゝあれとまたぬむもの成けり

前大納言経房家の哥合に　前中納言資實

いく人の代々にたえせぬ花の名をさこそはみよしのゝ山

建保五年四月庚申に春夜といふ心を　後久我太政大臣

いまはまた霞吹とく春風に月の桂も花のかそする

五十首哥たてまつりしに　後鳥羽院御製

あくるよりまた霞のほまらにあらし里はいつてよそり最明の月

春哥中に　前太政大臣

山櫻ちるさへ雲間にをそすみえてのこるあはれの月

朝花といふ事を　入道前摂政左大臣

山の端のあさけの風も心あらは花のあたりはよきて吹かなん

名所花といふ心を　藤原隆祐朝臣

吉野山ひとつにみえし花の色にかゝれる雲そ嶺をわかれて

入道前摂政家歌合に雲間花　正三位成實

桜花さかりに山の夕日はれて雲のいつちよ雲ふかきかな

毎春見花といふことを　徳大寺左大臣

あかてのみ花に心をつくしつゝくらしなれぬる春はあれとも

亭子院歌合に　延喜御製

春風の吹かぬ世にたにあらませは心のとかに花はみてまし

花為春友といふことを　基俊

毎の春にもいてや櫻の花ころもそふ風なからはちりもこそすれ

後京極摂政太政大殿によみて奉りけるをうけ給はりて後の春やかはるに川をそ申侍りける　式子内親王

雲の上に春をわすれぬやへ桜こゝろやさしき世にかはるらん

後京極摂政太政大臣

世の桜おかしき人のみかりの世はゝかしせの春にいつそあはれなりし

延暦二年大田の花御覧せんとて御輦いりてよませ

題しらす

後鳥羽院御製

九重は花は末に成ぬらむ春はむかしにかはらぬ

久安百首歌奉りける時

皇太后宮大夫俊成

ちるときは風にまかせてさくらの花のちりの色は

かくいはての錦

續後撰和歌集巻第三

春哥下

天暦七年三月御前の桜を折て人々におほせたまひて

侍りけるついでによませ給ひける

天暦御製

宮人のこゝろをよせて桜花をしむとゝめよかひもなかれ

題しらす

人麿

さけはちるちりのをかの山の桜花こゝろみてよかむいつまてかみむ

よみ人しらす

まちわひしときはなくとも花ちらぬ春の風もこそあれ

随風尋花といふこゝろをよみ侍りける

権中納言定頼

吹風をいとひもそらのこゝろ花ゆへ人とはいそかなる

百首哥よみ侍ける時

崇徳院御製

ちらぬまはさてこそちらめ桜花あかぬ人をもとゝめんと思へ

花哥中に

源師光

よしの山みねの桜をうちむれて桜ちるなる花のかけきく

洞院攝政家の百首哥に花

皇太后宮大夫俊成女

さそといちゝの花のうき世と契りけりさくらはまたぬ山櫻かな

道助法親王家の五十首哥に庭花

前中納言定家

あとたえてこそ庭の苔の色しのふはかりに花そちりしく

西園寺入道前太政大臣

葛木や花ちるころの春風にみえぬ雲かゝるかけはし

庭落花といふ心を

藤原教定朝臣

うちはらふ道の桜も冬ならぬ日かけし庭の花のちる雪

花哥中に

藤原信實朝臣

吹風をいとひはせむはなにしてちりかゝるこそ春の山守

従三位行能

いまよりは花やちるらん高円のおのへの宮の春の夕くれ

建保四年百首哥たてまつりし時

西園寺入道前太政大臣

おのつから前をとゝめてはなかすもみなの花の色そうつろふ

道助法親王家の五十首哥に庭花

春来ては訪しまては人もさそひつる風吹そけよ花のしら雪

題不知

右大臣

行さきの道ハうつろふ花とこそちらさぬまきの春の山かせ

按察使良教

いくとせの春かく風を恨きてちるならひの花とこそすハ

前大納言為家

あさまたきゆきとふりめくしいのゝ春さへゆきさき山桜かな

洞院摂政家の百首哥に花

前内大臣 基

何まてはりてみることもはかなけれちるをよそにもしむ心そ

名所哥たてまつりしとき

前中納言定家

みよし野ハ花にうつろふ山なれハ春さへみゆきふる里の空

建保二年内裏に詩哥をあはせられ侍りしに河上花

名とり川春の日かすハあらハれて花にそしつむ瀬々のむもれ木

花寄中水　　　　　　　　　　　前内大臣家

桜花ちりて〻水のなかれにもあさくそみゆる春の色かな

正治百首哥たてまつりける時　　　　式子内親王

今ははや風をもいとはし芳野河いはこす浪のしからみもなし

題不知　　　　　　　　　　　　左近中将公衡

見あかぬは峯の桜をあきとみて雲にあまるゝ吉野の風そふくなる

郁芳門院安芸

みなかみに桜ちるらし吉野河いはこす浪の花とみえつゝ

落花不語空辞樹といふこゝろを

八条院高倉

ゆきとのみ桜はちりてゆくすゑもいとやさしくもむかしの春を

名所哥よませ給ける中に春

土御門院御製

宮木守なしとや風もさそふらん三よしのゝちらしのよもきふの

故郷花といふこゝろを

入道前摂政左大臣

ちりよらはなにはのつきに春風よ志賀の花園あれまくをし

千五百番の哥合に　　　　後久我太政大臣

まよふともやとりし嶺の白雲はちりての花の形見なりける

題不知　順徳院御製

花鳥のほかにも春のありかほにかすみてかゝる山のはの月

小式部内侍

見てもなほおほつかなきは春の夜の霞をわけていつる月かけ

百首歌奉りし時春月　皇太后宮大夫俊成女

かはるよは我身ひとつのうき世にも昔にかへる春の夜の月

源俊平

月影にむかしの春をおもひいてゝ我身ひとつとなかむらん

暮春のこゝろを　藤原信實朝臣

今は又花のみやこもたのまれすなれし雲ゐの春そくれゆく

題しらす　躬恒

あくまても花やはことゝおもひてそくれゆく春の鶯の聲

亭子院歌合に　延喜御製

みれとこそ春やくれぬらんみよしのゝ吉野の河よかはせもそせ

山吹を　土御門院御製

浪のよる井手の山吹ちりぬらんかけはみえつゝなくかはつ

家に五十首歌よみ侍りし時河款冬　入道二品親王道助

吉野川いはこす浪の山吹に春の日数をとゝめかねつゝ

前中納言定家

山吹の花よとろくあしかはのなみのあやはたれにかよりて

延喜十七年哥たてまつれとおほせられけるに

貫之

あさせのかはづ鳴なる葦引の山吹は花今やさかりなるらん

題不知

後鳥羽院御製

かはづなくかみなひかはに春くれてちるやいかなる山吹の花

藤原信實朝臣

春くれて井手のかはづの声まても[illegible]

建長二年江上春望といふ題にて詩哥を合せ

[illegible]しつかうよ　太上天皇

鷺のゐる池の岸の松かえよりかけて千代の浪そかゝる

堀川院に百首哥たてまつりける時

基俊

むらさきの雲よりかゝる藤花春の名残にかゝるいはきを

藤をよめる

猶部成範

立かへり松にかゝれる高砂の松にかかれる藤浪

池邊藤といふことを

いくとせもしられぬ春の我やとに池の藤浪かけてまたに

影さへ[illegible]

後京極摂政前太政大臣

春をへてかはらぬ色の藤花たえぬ人のかけなりけり

暮春のこゝろを

くれぬとも花と月とにわかれねはのこるやいかに春のわかれ路

藤原光俊朝臣

見てもなほ春の別のをしけれはやよひの月のあり明の空

前大納言伴手

今はそのころのひかすもちる花のあともなく春やゆくらん

三月盡のこゝろを

土御門院御製

吉野河そこぬ春もとまらねは花のしからみかけてとふ世を

春の別の哥とて

前大僧正慈鎮

わかものていかなる人の哥もらん春はなかなかなからそゆく

皇太后宮大夫俊成

惜く春はしはしとゝめよいはねにくらす乃別を

をしむ君かな

續後撰和歌集巻第四

夏哥

百首歌よませ給うける時首夏

右近大将公相

立かはるけふの卯月のしるしにや秋のこゝろは梢なるらん

藤原行家朝臣

梢より月のしめ引く三室の山は秋まつらん

夏哥中に

皇太后宮大夫俊成

卯花の浪もこゆると見えけるは名にもこえたる玉河の里

亭子院歌合(の時の)哥

よみ人しらず

いづれをかそれとも分かむ卯花のさけるかきねに照る月かげ

題しらず

和泉式部

わが里にしばしきなかん郭公夜はいつこにも鳴わたるとも

小辨

[illegible]

藤原清正

郭公まちきく物を夏ハなれぬに近よまされたる里

洞院摂政家の百首歌に郭公を

前内大臣 基

鳴ぬかの今夕のそらに郭公[illegible]らん

百首歌よみてたてまつりし時郭公といふ心を

権大納言實雄

まれにまつこゑはいはずらかれてきく人傳にしも聞かれけり

卯月のつこもりころ女房ともあまたくして郭公きゝに

ふかくて西園寺にまかり侍りけるに郭公を聞てよみ

侍りける

前太政大臣

郭公ゑうらやましき山里はまつほともなく聞けはそなく

常盤をまうでてよみ侍りける

前内侍

雲井より里まて鳴くは世は郭公まつ聲きゝしものを今

家に百首歌よみ侍りける時郭公を

後法性寺入道前関白太政大臣

わかやどに思ひもかけぬ一聲は待ぬ我さへおどろかれけり

宇治にすみ侍りけるころみやこの人のもとにつかはしける

宇治前関白太政大臣

里なれぬ山郭公こゝろしてみやこの人のなさけとゞめね

をし

祐子内親王家紀伊

みやこにはいかばかりかはまちつらむ山郭公きゝし聲を

卯月ばかり道命法師山寺に侍りけるにつかはしける

赤染衛門

山ちかく鳴ん聲を郭公きくゆ内さりてかなしいそやれ

高陽院哥合に初郭公といふ心を

藤原正家朝臣

来ぬれとまいつかくらん郭公あかつきつくしや聲きかの一こゑ

夏夜中に

平政村朝臣

一聲に行く月のしのゝめの秋もまつよいきさかくに涼

法印覚寛

かつらきさそいて中に郭公まつ山のはにゐる月

題不知

大納言通方

卯花乃さきちる里乃郭公月もうしやとなきてゆく

順徳院御製

今こむといそぬつりそ時鳥有りあけの月の村雲の空

郭公暁過といふことをよみ侍りける

あさ戸あけてしはしかきこえ郭公いつくをさして鳴渡らん

久安百首哥奉りける時

待賢門院堀河

まつ程におとらぬやはな郭公きく一聲のあかぬなけきさへ

中納言行平家乃哥合に

よみ人しら次

夏山のきこゑ里にかねてもまちくらしきゝし初聲はきくよりさえもまさりけり

みちのくのあさかの沼に給ふこゝろ五月まて都に来ぬは
ぬれハかやこよひの人ふかたふかにつけて申けるを給

藤原實方朝臣

宮古にハまたけくあやめかるらん都ハ関のこなたなれはや
なし

讀人しらす

かくま来波にこえぬ関のあなたせハ宮の杜さへよまれて漁し

題しらす

後鳥羽院御製

ぬれ〳〵山田のさなへとるとて取とりてくるゝ夜にこゑすみ

建保三年五首歌合に夕早苗

參議雅經

里ゝさ田中の杜の夕日影ちりもはやへいとるゝ中へぬれ
早苗を

土御門院御製

さなへとる依乃の里に雨とてもむかしの山に雲そかゝれる

順徳院御製

嶺乃松入日すゝしき山かけのすそのゝ田にさなへとるなり

右衛門督基氏

今はさ月来ぬらん磯の杜かけのをやま田にさなへとるなり

百首歌奉りし時おなしこゝろを

前内大臣　基

山かけの小田ハ志ちかきかたよれは日のくれ〳〵にさなへとるなり

少将内侍

みふくろかは道そに袖をひちておりたつたこの早苗とる頃

十首歌合に五月郭公といふ心をよませ給ける

太上天皇

里なれて今そ鳴なる郭公さ月を人もまつ色ならし

権大納言公基

人しれすまさる物を五月雨にさそはれてこそ鳴郭公

題不知

従三位泰光

わかやとよそのやとりの郭公それもしのひの雲井なるらん

権大納言忠信

かきくらす雨もおなしく郭公なかなく里なれぬ比

従二位家隆

いくせの鳴かはしてかへるさ深きみ山のさとのはる

夏歌中に

前大納言隆房

五月雨はおなしなかれの名のみして深くなりゆく忘れなるらむ

太宰大弐重家

さそな道の日のすきにぬはおなし川さへ渕になりぬる

前大納言為家

大井川ゆきかふ瀬よりあふくかひ

正治百首歌奉ける時

源師光

みなせ川すゝしきよるのみをなへの瀬川一ふしまりぬさみつゝまとのほる

建保四年百首歌中に

僧正行意

ほしあへぬころもを雨に河風のこゝろの浪に五月雨のころ

覚盛法師

五月雨はたえまにたえ入にしあとのつゆこえぬるも雨まこそ数ゆく

皇太后宮大夫俊成

下草はすゑ葉つゆに成にけりうきたの杜の五月雨の頃

建保二年内裏百番歌合に

参議雅経

三わしかねるころの谷にきもそのおほゐ(?)もみえぬさみたれの比

順徳院御製

五月雨の雲のたえまをまつ程に絶えても月みる程の秋そすくなき

寛平内時后宮の歌合歌

よみ人しらす

夏の夜は水まされとや天河なかるゝ月のかけもとゝめぬ

題しらす

修理大夫顕季

くるゝかとみる程もなくあけにけりいつをよひともなき夏の夜の月

大炊御門右大臣

夏の夜は天のいは戸ハ曙よりも月のむかへ待程もなく

後京極摂政前太政大臣

鵲の雲のかけ橋程やなき夏の夜わたる山の端の月

正三位知家

うふ人ハなかるゝ川をもいはし葦の葉分の下にさす月

鵜川を　藤原教雅朝臣

かゝりさす浪の花をも見るなれやからす河瀬によるゝ鵜飼

夏哥中に　雄明親王

夏の夜は江のほとりくさまくらまくらのそてにくるかなかたくなし

建保五年四月庚申に夏暁

前中納言定家

鳴ぬなり夕つけ鳥のしたり尾のおのれにもにぬよはのみしかさ

百首よみ侍ける時　殷富門院大輔

いまそまたいはかるゝわかれなる夏とふころや松の下草

百首歌たてまつりし時夏草

前太政大臣

露むすふ籬にあまる夏草のうへにもなをしにしこゝろかや

題しらす　後鳥羽院御製

夏山のしけりにもつは露くたるやうに世秋かひなくま

堀川院に百首歌たてまつりし時

権大納言師頼

草ふかみゆふさりまちぬはに蛍こそひとよもえわかりけれ

建保四年百首哥に

参議雅経

夏山のきさゝへにしけるくぬきからおもひこかれてとふもけらなき

亭子院哥合に

よみ人しらす

夏の池によるへさためぬうき草の水よりほかにゆく方もなし

崇徳院に時泉避暑といふ事を人々つかうまつりけるに

按察使公通

岩のむしろハいそくけふのそこきよみ下にハ夏もかよはさりけり

千五百番哥合に

後京極摂政前太政大臣

山ひめの滝の白糸くりかへておりてふぬのハ夏衣かも

正治百首哥奉りける時

小侍従

河のせやハ山井の水のすゝしさに夏を日なからわするゝ

松下納涼といふ事を

源季広

松かけハそのゝしみつをきゝなしてむすふ手にも風そすゝしき

題不知

西行法師

山里ハそとものまくす葉をしけみうらふきかへす秋をまちけれ

夏月のうた

前中納言匡房

杉むらは浪のよるよる河社秋よりさきにすゝしかりけり

百首哥奉りし時六月祓　　太宰権帥為経

夏くるゝ禊たちいる河のせはぬさとみなれよくる浪のよるまて
かけし心を　　藤原隆信朝臣

夕そきす浪いくしのさてや風そきて涼しくなりぬ六月の空
後京極摂政前太政大臣

みそき川浪のしらゆふ秋かけてはやくそすくる水無月の空
皇太后宮大夫俊成

ならせの西の河瀬にみそきせんいはこす浪も秋やちかきと

續後撰和歌集巻第五

秋哥上

初秋の心を　　後鳥羽院御製

きのふかもあさけの風のをとかへて神なひの山に秋やきぬらん

後京極摂政前太政大臣

風のをとにはふかぬまも秋のたつ田姫あらしもいろをいかてそむらん

千五百番歌合に　　大蔵卿有家

きのふまてすゝしくなひく夏草の野辺の鴻にも秋はきにけり

寛喜元年女御入内屏風に海邊秋風

正三位知家

わたのはらあさきりかゝる浦まつにすゝしく成ぬ秋のはつかせ

初秋の心をよみ侍ける　　藤原隆信朝臣

今更にきゝけん物をそれとなくおきの葉かけて秋のくるらん

久安百首歌に秋の歌とて

大炊御門右大臣

いつしかとけさ吹風の身にしみて秋の色をもしりにけるかな

清慎公家の屏風に　　貫之

いつも吹風とはきけとおきの葉のそよくをとにそ秋はきにける

題不知　　小野小町

かりそめにすゝむ月にしもあらねはまつ秋のなかきよにかゝりけり

山田法師

萩乃葉に風よそよきてをとすなる物思ふ袖に秋やきぬらん

九月十三夜十首歌合に初秋露

行円

おく露は草葉のうへと思ひしに袖さへぬれて秋はきにけり

名所歌奉りける時

前中納言定家

秋とたに吹あへぬ風に色かはるいくたの杜の露の下草

建暦二年松尾社歌合に初秋風

葛城のまきかはいつくにわたすらん松さへあきの色

建保三年五首歌合に行路秋

従二位家隆

玉桙の道もやそらも白露に風の吹しくをのゝしのはら

題しらす

寂蓮法師

今よりの秋のよせやいかならんけさ葛のうら見かほなる

題しらす

山辺赤人

秋風の吹にし日より白雲は色かはりつゝ山のはにしれる

一とせにふたゝひこそ七夕のあふせのかすのまたはすくなれ

山上憶良

久方のあまの河原のかよふ小舟よせてこよひの君のわたりきまさけん

寛和二年内裏歌合　堀川右大臣

たなはたのいとによりとめて解鈎あふことをしもたえてかけける

七夕心を　従三位行能

天河あさ瀬あとむまし心より絶らこそわたる烏鵲の橋

前大納言隆季

さめぬよはあまの河原のうつゝのいそ枕そてをそてあかしそしらぬ

土御門院御製

秋をまたあまの河原に立浪のよるそみえける星合のそら

入道前摂政左大臣

天河ゆけは草の露のまに小舟まつ来てそあけぬこのよは

人麿

あまの川霧立わたる七夕の雲の衣のかへる袖かも

八日の朝よませ給ける　延喜御製

彦星のまちてわたらの天河わかれむ渡にたちさはくらし

おなしく読侍ける　嘉陽門院越前

織女の渡やそてゝくるらんわか衣手のけさはひ露そふれ

七月七日夜小辨上東門院にまいりて朝いてゝよみける

小式部内侍

かへし侍る

七夕にかしてわたしてなかの紅葉をも忘ゆへかされてこしかなかる
やし
小辨

あまの河あふ瀬まれなる七夕にかしつる糸の数やいなし

題不知
源重之

毎ごとの別し日より秋風はよそにしもなく成さはつゝる

九月十三夜十首歌合に家秋風
少将内侍

かきくれなる山の下葉らかはいさ人をとしせて秋風ぞふく

文治六年女御入内屏風に
後徳大寺左大臣

住吉の松のうらはよりきこえて浪まをのよに松風ぞふく

建保二年内裏秋十首歌合に秋風
参議雅経

今よりの萩の下葉もいかならむまつねそての秋風ぞふく
従二位家隆

秋露

をとめこの袖ふる山の玉かつらみだれてなびく秋のしら露

題不知
中務卿具平親王

いかなれば秋をとふとて露にすゝむおきあかしける秋の露かな
基俊

たきの葉に玉ぬきちらす胡露をはらふあらしそみだれかゝる

順徳院御製

草葉にをきそめしより白露の袖のほかなる夕くれそなき

建保四年内裏百番哥合に

前中納言定家

たえて世をしのふのなさけよをく露も草葉にやとる秋の夕暮

題しらす

西行法師

あはれともいふにものゝかなしけれはたれにかたらん秋の夕暮

雅成親王

うき物と思ひとりてもすてぬ身に又あはれなる秋の夕暮

藻璧門院少将

なかむるによそめにつらき心にも秋のとまらぬ宿の夕くれ

源家清

すてはてゝ身はなき世のおもひにも猶物おもふ秋の夕暮

入道前摂政家に秋三十首哥よみ侍けるに

侍りし哥

権大納言実雄

ときわかぬ松も夕はものうきを秋とも人のおもひけるらん

落葉を

権僧正範玄

をれすくれはよはりはつる秋の夕くれまつのかすゑにちるこのはかな

寂延法師

色かはる梢の風もさひしきはちりしく秋のきにけり

二條太皇太后宮大貳

白露ハむすひをけるも花薄草のたもとハほころひにけり

鳥羽院御時前栽合に

大蔵卿行宗

たれすきとまねくはかりのせにはあらて秋のこゝろのせにかたをしるさし

題しらす

伊勢

秋の野の花の名たてに女郎花かりにのみくる人にをらるな

弁乳母

けふのゝ花見にゆくのゝ花になかめつゝ

陽明門院

露おもみおれてそ人にまかせつるこゝろの花しみなむとさも

秋歌中に

式子内親王

しつかなるところあかくはおとろかれ萩の下葉に秋をしるらん

鳥羽殿八月十五夜の歌合に野草花

前太政大臣

をく露もおもへはけふにかすの野にのこるこゝろを秋萩の花

九月十三夜十首歌合に朝草花

太上天皇

わかれしよ朝きにうすきところそ袖にうつろふ秋はきの色

土御門院小宰相

露おもみあさをやくもにかさなくうつはの庭にみる萩の花

題しらす　権大納言忠信

宮城野萩乃下葉もいろつきぬ露のこゝろや秋の限に

源家長朝臣

深山にはをしかなくなりすそ野なるをかへの萩の花さくらん

久安百首歌に　藤原實清朝臣

妻こふる涙なりけりさを鹿のなくねにそむる萩のした露

名所歌よませ侍ける時　前中納言定家

うつりあへぬ花のちくさにみたれつゝ風のうへなる宮城野の露

建保二年秋歌たてまつりけるに　従二位家隆

さを鹿のたつ夜露をはらふ野原の萩の花そちるらん

秋歌中に　前内大臣家

うつろふも秋をしきむねく露のをきぬ日数

藤原隆祐朝臣

露むすふ萩のうつろひて夜寒もまさる萩か花色

堀河院百首歌たてまつりける時鹿　基俊

朝露にうつろひぬへし小萩原のわけをよする秋の花すり

鹿歌とて　鎌倉右大臣

なさけなく霧に都はへだつとも秋たちぬとて風ぞ吹なる

藤原清輔朝臣

高砂の尾上の風やさむからんすそのゝ原に鹿ぞなくなる

後朱雀院のみこと申ける時聞鹿聲と
いふことを人々によみ侍りけるに

権大納言長家

妻こふる鹿ぞなくなる小倉山峯の秋風さむくふくらし

千五百番歌合に

後鳥羽院御製

日影さす外山の松の秋風に夕くれしるく鹿ぞなくなる

康保四年内裏百番歌合に

従二位家隆

葦引の山のしつくに立ぬれて妻こひわたる鹿ぞなくなる

入道前摂政家秋三十首歌中に

前関白左大臣

秋風に妻こひすらしおしかさの山の松の[illegible]になくなる

暁鹿といふことをよませ給うける

太上天皇

[illegible]の色やかはらんしかさそふ声に[illegible]

百首歌奉りし時夜鹿

中納言資季

むさし野ハわきもなくし山の秋のよ深くもしらでや鹿の鳴らん

藤原信實朝臣

秋風にはけしきまつ山のよあらしもこゝろある人の鹿ハなくらめ

山鹿とこそいへ

藤原經定朝臣

小倉山くもる朝ゝに秋の色の身にさえしむや鹿の音する

秋の中よ

源資平朝臣

あきられハちかくに思ひのあかれしに月よなれて鹿も鳴也

藻壁門院少将

かすかなる夜のまてつゝ秋草にやつれや鹿の声をきくらん

建保二年秋十首哥よみてたてまつりける時

前中納言定家

毎かさこれおもも秋ハ毎のもの成わかれを

鹿ハなくなり

續後撰和歌集巻第六

秋哥中

是貞親王家の哥合哥

壬生忠岑

あま雲のやそちにいそく人のみはまてや秋くる鴈の音をはなくらん

中納言家持

秋風に寒きあさけは佐保路の鴈の雲かくれゆく聲きこゆなり

前内大臣家

ゆふまくれ雲路をそらの秋風にたえたえわたる初鴈の聲

前太政大臣家に十五首哥よみ侍りける時

右近大将公相

しら露はおきし枕とおもへとも秋はみやこに初鴈の音
聲しらす

聖武天皇御製

さほ河のあさけの鴈の音きゝて鳴なる錦のあきはきの花

よみ人

嵯峨院御時百首哥たてまつりける時霧

権大納言師頼

吉野川たえてもなく夕霧にやそせの浪のおとそすさめる

西園寺入道前太政大臣家三十首哥よみ侍ける
に秋哥

従二位家隆

朝日さしひをのゝ尾花たちかくれてたつともしらぬ河霧

題不知

後鳥羽院御製

あさ日さしてゝゝ里とをき河霧晴てしらむをちかたのそら

後久我太政大臣

立こめてそこともみえぬ山峯の霧のたえまにかりそなくなる

後京極摂政前太政大臣

すまの浦のとまやもしらぬ夕霧にたえ〳〵てらすあまのいさり火

建保二年秋十首歌よみけるついてに

後鳥羽院御製

數鳴や海のまとしに山乃端を世に雲かゝる嶺をいつる月かけ

百首歌たてまつりし時山月

前太政大臣

あまつそらくもりもひさの秋の世に山のはなれつる月をみるかな

月歌中に

寂蓮法師

ひとかたになきつくし秋の世もさそとはれつる月をあかて

西行法師

あまのはらおなしいはとをいでぬれとひかりことなる秋のよの月

長承二年内裏にて月不如秋といふ事を人〳〵よみ侍けるに

徳大寺左大臣

いつとてもしらぬ雲井の月なれと秋はさかりにてりまさりけり

月歌あまたよみ侍りける中に

西園寺入道前太政大臣

あまの河雲のみをゆく月影もせきとめてうつるやとの池水

法成寺入道前摂政左大臣家の屏風に

雲地ゆくみれそこまてにしをむ月いらへてこえてうつる水かな

紫式部

くもりなきそらの鏡とみつるまてに秋のよ長くてる清月の影を不知

京極前関白太政大臣

みかさ山嶺よりいてし月さへのあはつらにもてりは清外

建保四年百首哥めしけるついてに

後鳥羽院御製

久方の月影さらしかきのもとに雲井をわたるよの秋の世

正治百首哥たてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

あまつ風みなれてわたる久方の月の宮こにまよしくも飛ん

月前中秋

皇太后宮大夫俊成

月きよみかへ都の秋をみまく世ハ千里よきよけの山そなり

八月十五夜よみ侍りける

寂然法師

名にそへて秋のなかはのこよひそとおもひしらるゝ月の影哉

入道前摂政家八月十五夜哥合に名所月

後鳥羽院下野

泊瀬山槻つきかたにさしのほるこよひの月なお名にそたつ 弥

賀茂重保か歌合によみてはへりける

前大納言経房

むかしより名たかしもとこの月をまつとも秋の半やこよひなりけん

二條関白家の八月十五夜の歌合に

周防内侍

そらはれやかなしけり人の秋のそらにしもあらしと思

華山院にてよみ侍りける時

戒秀法師

捨くすゑてこよひの月を思ひてもまちこそ見てん人はことなん

昌泰四年八月十五夜哥合に

よみ人しらす

月影をまた霜とのみ捨てやいかによむよ風さはかん

題しらす

後鳥羽院御製

秋の田のほなみもよそにふく風に月をてらさく露のたまかな

河上月といふことを

権中納言長方

たまさかにむかふのくれ河のそこにきよき月のかけもうつれり

駒迎のこゝろを

大蔵卿雅具

相坂の関道はけふのけふそれをこよひそ秋の望月の駒

建保四年百首歌に　前中納言定家

秋の月河をとをすみてあはれいかにかはらぬ色の離とや雫

建仁元年八月十五夜和哥所撰歌合に河月似氷といふ事を

嘉陽門院越前

月影は氷とみえて吉野川いはこす波に秋をせきぬく

正治百首歌に　後京極摂政太政大臣

辛崎やにほてる沖に雲きえて月の氷に秋風ぞふく

九月十三夜十首歌合首のあつらへの橋のうへに
てはべりしが文書にて録せるを仰しける時名所月

太上天皇

月も秋の名よくらし橋柱あらはにやすみ渡るらん

左衛門督通光

秋の夜はしらす海の関守すみそめて月や旅ゆく人をとがめん

少将内侍

こゝろしれ草屋の里は風に海ていふかひそなむかたの月をいかに
影しらず

前内大臣基

すむ月もいくよしになりぬ難波かたあしの葉にして秋の夜の色

十首歌合に海辺月といふことをよませ給ひける

太上天皇

志賀の海の浦の烟は海にまよひて月ををかしきさに

まつらかたみなみの浦ハ名のミしておなし影なる秋の夜の月

藤原為教朝臣

とをさかる海のおもてに秋わけし風たてさかす波の秋の月

源俊手

月前風 中小

蓮生法師

里の海人の浪かけ衣よるはたゝ月にも秋はさえわたるらん

平重時朝臣

ちりまかふ松の北風よそにてる月のひかりをみてもすさましきかな

藤原基綱

みやこまていかてかよらん紀の国や吹上の浜の秋の夜の月

九月十三夜十首歌合に名所月

權大納言實雄

あきつすの世吹上乃濱の白妙に松すゑのかた秋風に見る月

入道攝政家の歌合におなしこゝろを

後嵯峨院民部卿典侍

いくかへりすまの浦人わかための秋としもなき月をみるらん

十首歌合に海邊月

右近大将通忠

わたのはらよせくる浪のいたつらに思ひたえぬ秋の夜の月

順徳院御製

影しらす

あかしかた浦のとまやの煙まてもたえてたくなる秋のよの月

藻璧門院少将

雲ゐ人もおなしと思ふと三輪の山はいかにすむらん杉の庵の月

九月十三夜十首哥合に名所月

前参議忠定

秋をおもひし雲にたえかし高木や嵐吹くよはに出る月

侍従為氏

秋をふかくさえ行月のひかりには霜とてこそやとそへにける

藤原教定朝臣

しらぬ宮にひかりやさへかはらん昔にかはる秋の夜の月

田家月

後鳥羽院下野

秋の田の露しくここのいほりして月の夜さむもさそあはれなる

祝部成茂

むきえしみとこゝろをそふにいほりあて穂よりはこほる秋の月をみるかな

法眼耀清

もすみけるやまたの川は秋の田にいねそよのうき月やみえん

刑部卿範兼

むすふかなしの世にもあるらんいとなみてあかぬ秋の月を見るかな

相模

いたくまのかりのやとりもさひしくて夜なく露にやとる秋のよの月

藤原仲實朝臣
詠しもつきもの君をとこそまつ思ひやる月をみて
堀河百首歌中に　前大納言忠教
うきときも思ひやられて嫉の月昔も見しにかはらぬ夜な
月哥中に　前中納言定家
むかしにも雅者の雲井の秋の月志ら浪いくめぐりとも
西行法師
世のうきに一方ならずうかれゆく心さためよ秋の夜の月
正三位知家
かりそめにみし世の秋もわすれぬる昔の月よ見しやたれならん

入道二品親王道助
いつとても見るなる月の今宵ま三十あまりの秋そかなしき
藤原信實朝臣
今宵ぞや光の涙に哀らん昔とみるの嫉の夜の月
我とみるさへなかなかいとはしき昔の夜のこよひ月とみれは
源家長朝臣
秋の月なかめて老の世も山のはちかくなりにけるかな
題しらす　土御門院小宰相
なかき世のなかなか思ひをいつしか月よなくさむるすへは
土御門院御製

秋乃夜もやゝふけにけり山鳥のをろの尾上の有明の空

建保二年秋十首歌たてまつりけるに

従二位家隆

さのいまもよわく篠原をく露よりまさりて狂ふ松虫の声

秋乃歌中に虫を

前大納言忠良

身よそへばかり鳴虫そなれしれ我のみからぬ秋のかなしさ思よ

後鳥羽院御製

をく露のおきゐね月のまに浅茅原すゑはかなる松虫の声

藤原信実朝臣

あさちふの秋乃虫のすむ蓬が杣になきあかすらんかり

今こぬあさちの宿は秋風に虫のなくなくそ松むしのなく

土御門院小宰相

百首歌たてまつりし時暁虫

後鳥羽院下野

おきゐてもいくよなきよる虫の音に浅かたそらし萩の花の露のまよ

題しらず

正三位知家

蟋蟀なれもかたみをするの秋の思ひそまさりてかなしかるらき

法印幸清

あさ秋のよも枕乃もとになくらくはかなき夢の夢に秋をあかしたえぬ

忠見

さ夜のまくらかりして蛬なくに秋のよはなかし

和泉式部

都乃田舎庵にあけくれまちつゝ露の袖ぬらしつ

式子内親王

をしわかす山田の秋のかり枕なれぬる袖のそての露かな

正治百首哥に

従二位家隆

吹しほる嶺の草木もいかならん袖にふかき秋のあらしに

續後撰和歌集巻第七

秋哥下

人〻に百首哥めされしついでに擣衣

太上天皇

秋やさむ未た川のをとまれぬるよしはしの夜半に衣うつ也

辨内侍

よを寒み秋かぜにをとしてせきやよるやさむく衣うつらん

後京極摂政家に十首哥よみ侍りけるに

前中納言定家

河風によはる月のさむけれはやそうち人も衣うつなり

名所寄衣といふ事を

後鳥羽院御製

雲井とふ鴈のはかせに月さえてこゑさえ里に衣うつ也

擣衣のこゝろを　土御門院御製

あさちふのはらのあさちをふきしほる風のよすかに衣うつらん

順徳院御製

小倉山ふもとをこめて里の夕霧にたちこそかくれ衣うつ也

雅成親王

むしのねもよわるよをさむしろにたゆたふもの衣うちわふる里

前内大臣家

山鳥のおのへの里は秋風によさむのころもうつらん

正三位成實

我をまつ人にしらせん聞く秋の夜をたえすもうつ衣なれ

入道前摂政家の歌合に風前擣衣

後鳥羽院下野

吹おろす比良の山風やさむからん浦人のころもうつなり

秋の中に

平重時朝臣

たつ河霜のおく里さむき秋の夜にまちかくうつ衣かな

海邊擣衣といへることを　権律師公獻

松嶋やあまのとまやも夕くれはしほかせさむみ衣うつなり

千五百番哥合に　二條院讃岐

ととこもにしあまし(?)もしきいかの浪のよるは衣うつなり

聞しらす　良暹法師

秋もすゝろもなにゆき涙衣もなか誰かいかなる

伊勢大輔

風の音ふけたるつきゝてやゝきこゆるも野をはなここに衣うつ

忠義公家にて人々よみ侍けるに

紀時文

秋くれはなりゆくのへの出る袖はきゝ人さへも露そもりける

皇太后宮大夫俊成

月のゝ紀し誰か思きあさらすに恨てしかく出る影かな

名所百首よみけるついてに

順徳院御製

水茎の器の河ちらのこらく寸露の霜やおきむすふらん

秋哥中に

前太政大臣

出る月のふりそむかいさらにふきにけるこそ暁の月

よみ人しらす

秋はきにしえともことにしに霜をおきてさむき時にも盛なりけり

人麿

あきされはいもに見せんと植し萩露霜おきてちりにけるかも

菊をよみ侍ける　　源正忠朝臣

うつろふもいろをみよとて菊花露もこゝろをおきてける哉

閏九月菊といふ事を

従三位顕氏

大方の秋よりも猶なか月のあまる日数ににほふしら菊

正治百首歌奉りしとき

土御門内大臣

ありあけのたなひく雲のみそらはかへるさのねとみえて山のはにつきにき

題しらす

人麿

秋山の木の葉も今はもみちつゝけさ吹風に霜をきぬへし

俊恵法師

うつらなくすそのゝ小萩うら枯て籬のまさきあきそふかき

法印良弁

有明のすゑのゝみちしはをそれたちもまよひてつゆけき

源家長朝臣

初時雨ふりにけれはなをまはすみかさの山はもみちしにけり

建保五年四月庚申秋朝

前中納言定家

小倉山しくるゝころのあさなく〱きのふはうすき四方の紅葉そ

秋哥中に

入道前摂政太政大臣

雲のはたてつくさぬ山しくれまたや秋の錦なるらし

建長二年九月山中秋興といふ題にて詩哥を
合せられけるに　太上天皇
いろいろの千しほの紅葉小倉山嶺の紅葉やゆきて見まほし
九月十三夜十首哥合に行路紅葉
権大納言實雄
武蔵野の道ゆく人の袖の色もうつろふ計にもみち紅葉
秋哥中に　藤原信實朝臣
たれかまたさくらかはなはしらかきもなきて手もとに秋の紅葉そ
寛喜元年女御入内屏風に紅葉
前大納言為家
龍田山よそに紅葉の色にこそしくれぬ松のほともみえけれ
紅葉を　従三位通氏
名のみしてかへぬ時雨はしくるゝときのかみ山のこすゑもみちぬらむと
土御門院御製
小倉山みねの紅葉はそこはくの秋のしくれにいくしほか染
参議雅經
しくれゆく雲のよそにてうつりけん山の錦もおもひしるらん
法成寺入道前摂政家の月並三首宇治にまかりて
道のまにまに紅葉をたをりて神なる人のなへとふを

くれはてすとて　従一位倫子

霧てらすあのみちのちるまに露よ成ぬへきかな
やし

枇杷皇太后宮

ちくにさへあけゆくみえぬ紅葉して散れ山のをとさへそ迷

寛平御時后の宮の歌合歌

よみ人しらす

秋山はくれなゐの升に成ぬらんいつか時雨の雨もりてそれん

秋の歌中に

恵慶法師

くれなゐよ染よる山の梢とそ時雨の雨のきよまきる絶え

寂縁法師

世々をふるかへて年ふる道はさ山秋は草木の色によそて

参議 経成

秋霧のたちましにみ絽の紅葉やいかにちしほの錦みるらん

建保二年内大臣家の百首歌に遠村紅葉

前中納言定家

山本の色もみちぬる錦かすたゝぬ霧も時雨にみえつゝ

題不知

土御門院御製

ちりはてのもみぢよ橋は人のまてにきえつゝ秋のなかるゝ

順徳院御製

秋は河秋をへて水のもしる人もなしやまの色紫なる

大蔵卿有家

秋ふかみこなせよ瀧つみちもなく岩にこす山の嵐なりけり

百首哥の中に時河紅葉

大宰權帥為経

散く水の淵瀬もわかぬ紅葉河ふね(こそ)の色もみえぬよそにて

題しらす

読人しらす

をしひきの山には秋そきにけらしつゆ秋の紅葉の色まさりゆく

清愼公家屏風に

貫之

時雨つゝ紅葉の月にちるらしも山もとすきて色つゆよ行

田家時雨といふことをよみ侍りける

法性寺入道前関白太政大臣

かりあけぬ草の庵のいさゝをあらみ時雨とともに山田をそもる

題しらす

基俊

吹わたる峯の嵐にそらはれてきえまく秋そなかめくるこゝろ

建長二年九月詩哥をあはせて讀侍りし時山中秋興

前大納言為家

紫の色をとこそくろきましに手向山をそみちをなれそ秋をこそつく

秋哥中に

藤原伊嗣朝臣

秋の中ゝ山ハそむけの岩よりてこれやなかさてちりまふ之

藤原親継

あらし吹みねの錦紛代ら秋の手向の袖にかゝらぬ
秋のくれのうた　藤原清正
風吹けはかへりてちりのふもとにみゆらんすゑゆく秋の手向なりけり
和泉式部
我ならぬ人もさそみむ長月の在明の月にしかしあはれは
殷富門院大輔
今そしる心はそらにやゆく秋のすゑのまつ在明の月
前中納言定家
いかにせんさらぬも物のあはれなる秋の末ならは袖の色も
祐子内親王家歌合に
紀伊
なかれくる秋の湊は風そかす紅葉の舟のゆくかたやなき
百首歌奉りし時暮秋　前大納言基良
いく秋のくれぬとはかりをしむらんもちもあまたの年を経て
権大納言實雄
しらしなをいつまてたかく波こえて秋てゆく物をたち
秋のくれの歌とて　藤原教雅朝臣
またなき霜のあはれをゆくとも秋をすくる秋の末
藤原信實朝臣

紅葉ゝを風にまかする手向山ぬさともとりて送る秋かな

皇太后宮大夫俊成

山路をもこえぬる月にまかる物をすてゝもとまる秋の空哉

堀河院に百首歌奉りけるとき

祐子内親王家紀伊

夕まくれ小あしにしてかよひこし人もおもひやりてあすさへ秋の暮

題不知

慧性法師

紅葉ゝに道はうつもれて跡もなしいつくよりかは秋のゆくらん

續後撰和歌集巻第八

冬哥

道助法親王家の五十首歌に朝時雨

藤原信實朝臣

冬来ぬといふはかりにや神無月けさはしくれのふりまさるらん

冬の哥とて

藤原光俊朝臣

夜をへてはさえくる時そ神なひの杜の木すゑもそめつくすらん

西行法師

東屋のあまりにもふる時雨かな誰かはしらぬ神な月とは

大炊御門右大臣

草乃葉よむすひし露の命さへいつしか霜に替かな

土御門院御製

紅葉ゝの色にわかれてちりはてゝ嵐に通ふ道もまよひぬ冬は人めに

正三位知家

神な月さそふ嵐にはかなくも紅葉の雲の絶間なる哉

百首哥よみ侍りしにその初冬時雨

太上天皇

冬来てはいとゝしくれのふりまさり嵐のさむき山

彩しける

前内大臣 基

行暮乃あさまに霜の世も深くて冬枯ゆく道ぞあはれなる

前内大臣 家

吹のこす嵐もしるし常磐山つれなき色も冬はみせけり

後鳥羽院御製

色かゝる柞は猶いかならんいはせの杜に時雨ふる也

和泉式部

我山寺の中さへ枯のみつ冬されはゆきもきえぬ道そあはれ

相模

芦葉のかれしの色の吹出る嵐さへ枯行道のあはれ

寂超法師

雅の夕まくれいかにすさましく時雨る空に小袖なからん

ちられしと秋をあはれにしきこそうつれはおなし水にみえける
紅葉ぬれしとおもひつるかな

西行法師

あすよりや嶺のあらしのさそふらん紅葉ちるらむ山川の水

八条太政大臣

延喜七年大井河に行幸の時

紅葉をしにおりてながるゝ大井河せゞのしがらみかけぞとゞめん

坂上是則

名所三百首の歌よまれける時

前中納言定家

大井河まれの御幸に年ふる紅葉は舟路あとはありけり

家に百首歌よみ侍りける時

洞院摂政左大臣

龍田川世々のしがらみかけてけりふるさと見えぬ紅葉ながれて

落葉の色を

藤原清輔朝臣

山ざとの風すさまじき夕暮に木の葉みだれて物ぞかなしき

皇太后宮大夫俊成女

ふみわけて更にとふべき人もなし霜にくちぬる庭の紅葉葉

円融院に一品菊たてまつるとて

尚侍藤原灌子朝臣

しも迷ふころにたにのこる花なれと雲井にうつる菊のかをりの波
にほひし

圓融院御製

いにしへをこふる涙のしくれにもうつりし花もかはる色かな

後一條院御時中宮於院に行啓侍けるに庚申の
夜月照残菊といふ題の心をよみ侍ける

權大納言長家

色さそふ枝にも露の霜なりて有明の月を照る白菊

建保六年内裏歌合冬山霜

前中納言定家

冬の日もよそにくれゆく山のはに胡霜にとまる松の下葉

題不知

大納言通具

野邊はまたをく露の名残も霜にしてあはれなる枝も長月の冬は

藤原經平朝臣

あさちふの下葉も今はうらかれてよなよなをける秋の霜かな

眞昭法師

さゆる夜の上葉かさねて霜をくる山田のくれの若草の下葉

左近中將公衡

霜こほる門田のかりほに鴫の羽をとももさむけき夜半の嵐に

惟明親王

風さえてかりたの田の畔にたちて霜にかたしく鴫のはね

ともしびのかきねにこほる水のうへにかつらの山も影やとるらん
前内大臣家
建保六年歌合冬閑月
順徳院御製
風さえて秋の家は世にかはりけりハ霜のまよひも月をみるらん
千五百番歌合に
前大納言忠良
あらしふく浪にそてらす山のはにふけて月はさえわたるかな
百首歌めされしついでに豊明節會
太上天皇
あとたえて雲ゐにすめる月影も雲の上にはさよふけて西にかたむく

権大納言實雄
月さえてこほりのくものうへにはとよのあかりの袖もさえつゝ
冬月
藤原經朝朝臣
枕なるつきよれはかたふく霜の上にかさねてさゆる冬の夜の月
元久二年冬月あまた夜和歌所のをのこともをぐして大井河にまかりて河邊寒月といふことを
をよみ侍りける
藤原清範
冬さむき嵐の雲も河上に氷ありてや月もすむらん
冬歌の中に
醍醐入道太政大臣
さよ千鳥浦つたひゆく浪のうへにかけてぞ月もこほりける

文治のころ百首哥よミ侍けるに

前中納言定家

浦風やとはに浪こす濱松の根にあらはれて鳴千鳥かな

題不知

長覚法師

なにはかた浪よせかへる磯のむらちとり心ありてや浦つたふらん

行念法師

桂河いそくりとはけの根によそてあらはに鳴千鳥かな

よみ人しらす

なにはえによはる舟ハさきこえし河のせハ中千鳥なく也

和哥所にて釋阿に九十賀たまはせける時屏風に

後京極摂政前太政大臣

山河せ風さえて中に花ハちりもこすせによせけり山川の岸

百首哥奉りし時池氷

後鳥羽院下野

いはまそとたえぬ水よ根をとゝめてふきよに河の池のうき草

天暦御時屏風に

中務

こほりゐる池のみきはゝ水鳥のはかせに浪もさはかさりけり

江邊氷といふ事を

権中納言長方

湊風さむく吹らしたつのなくなこの入江につらゝゐにけり

久安百首哥よ霰　　左京大夫顕輔

はらぬゝよ稀さよからちたりの冬の夜乃雲まよりあられまへる也
おもしろきを

後京極摂政前太政大臣

あまの河せをむすふいと浪のくたけてちるかあられなりけり

前中納言定家

霰ふるしつかさゝ屋のそよさらに一夜はかりの夢をゆるさみる

題不知　　人麿

夜をさむみねやをあけてけさみれは庭もはたらに雪降よりけり

井手左大臣

あしの山のいとまにあらすの猶のねて白髪よまて白雪

権大納言公実

さゝ浪やあふこさゝの道もたえて雪ふかゝりける衣の世山

入道前摂政左大臣

手向山紅葉のぬさいちりはてゝ雪乃白ゆふをかけてみゆ紀

道助法親王家の五十首哥よ松雪

前太政大臣

わか屋とはいけさゆる雪にうつもれて松に風乃をとつれてきく

従二位家隆

草乃原かれにし人はをともせてあらぬ外山の松の雪をれ

西園寺入道前太政大臣家三十首哥中に

下枝乃花さへちる桜のちりしきて雲乃そこまて見ゆる三輪の山

藤原信実朝臣

雲哥とて

千早振三輪の神杉いさ清く雲井かゝれは跡の見え(?)

杉のえたこし雲乃通路をしらて人の心につゝきて

中納言資季

奥山乃松葉にかゝれる雲ならてたえぬ世にある(?)種そ見えける

笠式部

題しらす

冬山乃雲のはれまもあらし(?)ふく方に流るゝか(?)なく鳴(?)なる

後鳥羽院御製

千五百番哥合に

山里を出入の雲乃行方には(?)なかなか松のしたかけの道

後京極摂政前太政大臣

雲を

庭の雲に(?)たなひく人を誘はれて(?)ものおもひの(?)さ(?)程そ(?)恋(?)しき

寂蓮法師

空晴(?)の上にさこそは雲のつゝむらめ(?)若葉(?)にかゝる峯(?)の白雲(?)

安嘉門院甲斐

峯しらぬ山をは人の尋ぬれと(?)み雲のみ冬(?)そ分(?)かる(?)

藤原基雅朝臣

嘉暦四年内裏後番乃哥合に

たえたえに華の雲ゐの春(?)の雲に(?)まよふの(?)風(?)に(?)ゆく(?)

前中納言匡房

冬の歌中に　　　鎌倉右大臣

夕されハ塩風さむし浪まよりみゆる小嶋に雪ハふりつゝ

海邊雪　　　藤原光俊朝臣

ふりつもる雪吹はらふ嵐風にあらハれわたる松の浦しま

久安百首歌に　　　藤原清輔朝臣

白妙の雪吹おろすかさこしの峰よりいつる冬の夜の月

歳暮のこゝろを　　　待賢門院堀河

白雪のはけのきえつる年をくれゆけハ我身もとしにつもりにしかな

式子内親王

今こそあれやこの我の雪の中にも春の隣ちかき袖よりそ

従二位家隆

雪のうちにつゐにもみちぬ松の葉のつれなき山もくるゝ年哉

正三位知家

さしむかふ鏡のかけも白雪のとしのつもりハ人のうへかハ

道助法親王家の五十首歌に皆歳暮

西園寺入道前太政大臣

おしみこしいかなるつらきことのねてそをとりむかふる年ならなれ

千五百番歌合に　　　按察使兼宗

さらぬたにハ秋山川のいそくてもさそひて年のなかれとそらぬよ

大神宮によみてたてまつりける百首歌の中に

前大僧正慈鎮

いかにせんとか首をとひつ祈て君のまもりにかけてたのまん

君のうらみて人をまもらん給ひける

皇太后宮大夫俊成

かくはかりむかしをしのふ世をわたりてやつれても

いのちなかりける

續後撰和歌集巻第九

神祇哥

百首哥よみてたてまつりし時寄社祝

前太政大臣

あきらけき君すむ国に跡たれし神のまもりや我君のため

神祇のこころをよませ給うける

土御門院御製

えらひをいふもろこし人萬葉にやはらけて神の国とも云はるなる

大神宮によみてたてまつりける百首哥の中に

皇太后宮大夫俊成

宮柱したついはねのいすゝ川萬代すまむすゑそはるけき

十首哥合よ社頭祝　太上天皇

ゆくすゑの世を源すゝ東にさる河そこに幾千世とせときりぬ色を

九月十三夜十首哥合よ名所月

前太政大臣

神ち山さし照こゝよ秋て澄ら月かゝるなかれにやとる月影

入道前摂政家哥合よおなしこゝろを

前大納言為家

五十鈴河神代の鏡かけとめていまもくもらぬ秋のよの月

社頭月といふこゝろを

権大納言公基

千早振神代よおなし影なれやすゝ川の秋のよの月

太神宮よよみて奉つる百首哥中に

前大僧正慈鎮

あまのむたよおまもる神の春の日に祭しすゝめのくもりなき哉

題不知

荒木田延季

神ち山みねの朝日のさすかくて浪榊やかきてとのさかゆ

太神宮乃一禰宜として年ひさしくつかへまつることを

おもひてよめる

おいぬしてもなを惠みとも川浪の世をゝて代ゝにつかへぬる

神祇哥の中に　　僧正行意

すゝ川ふりさけみれは神路山榊葉わけていつる月かけ

後鳥羽院御製

久方の天の露霜いくよへぬみもすそ河のちきのかたそき

社頭月　　西園寺入道前太政大臣

いくとせかきよき[illegible]にすみてしらん名におふ[illegible]の月よみの里

題不知　　前右近大将頼朝

石清水たのみをかくる人はみなひさしく世にもすむとこそきけ

後久我太政大臣

[illegible]て神代にかはらぬ[illegible]は[illegible]山[illegible]嶺にやとる月影

石清水社によみてまつりける　　後[illegible]内大臣

神もみよすゝ[illegible]そ男山ふかき[illegible]道に入来

大納言通方人々すゝめて八幡にて哥合し侍ける時社頭月をよめる　　法眼榮禅

みつかきの久しき世ゝの跡あれてあかくみ山に月そくもらぬ

賀茂社にまうてゝしはしこもりて侍ける時下社によみてまつりける　　前太政大臣

さのみやはかものかはもの河のそこ[illegible]せをはなれて世にも[illegible]

後一條院位におはしましける時賀茂社に行幸有ける

宇治又乃日の朝選子内親王のもとへつかはしける

上東門院

立かへる河浪よりにてくるしきやみ枝さしたる人のあたらん

皇太后宮大夫俊成むすめ述懐歌よみ侍けるに

ろ乃道のむかしはすこしわか名のたえまなきを

しるしと侍りしを前中納言定家と哀に思ひ侍りて

小侍従なる御朝かの歌をかしいてよろこひつかはしける

もとへとて

六條入道前太政大臣

いまそしる此道のこころの葉をうちそえて我のなかしとなくもさまで

権僧正円経人々にすすめ侍りし春日社にて十首歌よみ侍ける

慈信法師

春日なる三笠乃山の宮柱たてし誓は今もかはらず

住吉社にて三十首求子の歌よませ侍りけるに経国にまかせ

侍りけるに

前中納言定家

ちよ見よと此松の緑の色ものこるに昔のいくよの代にかかれ

おもひにまかせてもよくも見侍りけり

前太政大臣

松の緑に浪こす浦の家ところいにしへかけし誓をそれ

すみよしにさかえてもみえ侍るかな

津守国平

やちよをまつの千年といのられし代はふれにそふれ秋のみやこに

後三條院住吉に御幸ありける日よみ侍りける

大宰権帥伊房 于時参議

いにしへもけふのみゆきはありやとてたつねてそとふ住吉の神

大宰大貳實政 于時左中弁

あはちなるみをのみ掻きは住吉の松に花咲くさひとしれぬ達

題不知

前大納言光頼

住吉の松はしつえは秋のこひてゆくてさしてとちはきゝしらる哉

鎌倉右大臣

ゆくすゑもしけりはしらす住吉の松にいく代の年かへぬらん

建保三年五首哥合に松経年

後鳥羽院御製

かくしてさきに拾ひてあかつきの霜のいくとせ年のむもとに住吉の松

後法性寺入道前関白家百首哥に

宜秋門院丹後

神代より栽そめけん住吉の松は千年やかきりなからん

住吉にまうでて侍る

権大僧都隆覚

あとたれし神やうへけんすみよしの松の緑はかはる世もなし

三輪社にまうでてかきつけ侍り

前大納言為家

君か引みえし我松もいちよにましこそ君か千代の末しるき

建長二年三月熊野に御幸ありしに花まいりて

いはしろの松に首をむすひてかきつけ侍りける

前太政大臣

年をへてみゆきになれける契をも結ひそへしいはしろの松

東三條院の四十賀屏風に

源道済

神代よりいはひそめてし葦引の山玄椿萬代もかそへん

神楽をよませ給ひける

土御門院御製

榊とる八十氏人の袖の上に千代をかけてのそむ月かけ

百首哥たてまつりける時祝

權大納言實雄

千代の秋三笠の榊葉はいはふの八千世もろのさかえむ

影そしるき

相模

年ふかきしもしかはらぬ萬代をのそみにかけていのる榊葉

日吉社にまうてゝたてまつりける中宮大宮

後京極摂政前太政大臣

いにしへの鶴の林にちる花のにほひをよする志賀の浦風

十禅師宮

さのみやはにごれる世をもてらすらむひかりそへくる道をまもるは秋の月

入道親王尊快

尾上なる松も又契あれやひかりたえせぬ雲井の宮

聖真子宮によみてたてまつりける

権少僧都良仙

やはらぐるひかりはつねにあるらしな西の雲井の秋の夜の月

大納言になりて悦申に日吉社によみてたてまつりける

前大納言為家

老らくの身の世をいのりし誓ひあれや我やうけん

思ふことにかなひてあつさ比方よりまかりけるに日吉社

のちの世のまよひを入て涙のこぼれつれ

祝部成茂

たてけて次慶よましける歌そへて我も猿のこころ露

かくてまもりけきこころはわれもあやまらぬ紀年なく けさ

神あくの御かみの神事によみそへしとて扁りかある

言の道にてよみかの

契をかし我代のことはすまはこそいまつらん神もとまるかさき

小野宮によみてたてまつりける

前大僧正慈鎮

くもりなき世のすゑをてらしてや君か代はかぎりなくそ侍らん

たとへりある事を継申ておかしくきこえまつりぬ

前中納言定家

千早振神のさとしみよ記されし後さへ今治物やわかれん

元慶二年日本紀竟宴彦波瀲武鸕鷀草葺
不合尊　兵部卿本康親王

わたつ海の浪かきわけてあらはれし其言葉みことにいくよへ めん

同六年同竟宴思兼神　三統公忠

ここよたる鳥に籏をそへしえ広らかみえてよいあけをさめぬ

天児屋根命　橘仲遠

ここ風ミに天照神をいのりて其月日に昔を詠はさかゆ

神楽のとりものの哥

足引の山をゆきしみ山のさかきの枝を杖につきて

大神をやとしいえの根に玄木の梓に経霊のいとし勅

この哥は日吉にまゐりて年を経てむまの時 々人

の哥にたん着らんといつてこそ

續後撰和歌集巻第十

釋教哥

天平廿一年二月の山乃葉にてをはりをとらせ給ける遺戒乃哥

大僧正行基

かりそめ乃宿かる我そ今さらに物な思ひそ佛とをなれ

天台大師乃忌日によみ侍りける

大僧正慈恵

それ乃見ん雲井乃庭にあつまれりし萬乃迹も今日や恋しき

僧正静観

年をへていのりしかひて山乃花菩提の種となりぬる物也

題しらす

殼空上人

みな人の心のそこにあくかれぬやみにはらひし入月の光をとめみて

山乃はちかき月をかくしく月を見て禅室に入とてよみ侍りける

高弁上人

山のはに我も入なん月も入よな／＼ことにまた友とせん

無量義經従一法生

大僧都證観

春秋の花のいろ／＼さきぬとも種はひとつのこゝろなりけり

法華經譬喩品号曰華光如来の心を

皇太后宮大夫俊成

おくすゑの花の日かりな名をきくにやまてたまにゐふ心す

化城喩品　　八條院高倉

いそきこそちくハかり猶の草枕おくかくれみえしぬ宝

五百弟子品　　権大僧都源信

暗しまくてきよおやまよひまし衣のうらのむ玉なかりせハ

寂寞無人聲讀誦此經典

法橋春日

月影ハ法のこゑにはのこれんこゑのにゐそ嶺の松風

乃至以身而作床座　　崇徳院御製

前くハあくへあくなくひきそさおろ霜よの枕とも如し

唯髻中明珠　　京極前関白家肥後

もとおもひの中なるみつのむさゝかにさるもきりハ忘る人さき

人くみ同しハ品乃みつよまたせゆきる時勧持品

法成寺入道前摂政太政大臣

ゑ人るまれ道をたえむかる心よハ命をもたむわむとらなん

壽量品

人め世ハ世のうき雲よかくろへておすむれる山乃ろさ月

神力品乃あのもと見えなん

選子内親王

長やみの月のひかりにてらさはくらき道にやひかりさすらん

囑累品

権少僧都延真

あさましくすゝ葉の露はこほれても中にむすふ玉をしらなん

妙民得王

参議雅経

毎夜にもきさまれ世かはりになりて民のかまとも煙たつなり

厳王品

前大納言公任

ふたつなき契りあまたはうき世すむ流ての水ならなくに

心観の月隠重山擎扇喩之

崇徳院御製

雲ふかき鷲のみやまに入しより宿れる月をさやかにみけり

おなしく雲山大士結草為庵といふ心を

藤原光俊朝臣

うき山に草の庵をむすひきしのひうき世にやかよふ雲の山人

不断光佛

従三位行能

月もひとつ雲をはらひてあまねくも思ひまよふも人のさとりなる

三界唯一心

源有仲

野へことの秋の草葉にむすふ露も草さまて見る秋の白露

影不知

入道前摂政左大臣

二心あらたなるいまはかへさまよしいろかはりさてらぬらむ

生死長夜　　従三位行能

枕さゝる道にふかきねふりのさめやらぬ夢やこれあるらも

弘法大師ぞ法験事國史にみ枕つきてあるはなき（かき）

しても申ける人に　　中原師光

葦原のちりたえしのちかきをはしく法の道ともなさつゝに

後法性寺入道前関白家百首に般若心経色即是空々即是色　皇嘉門院別當

雲もなくかゝるそらに浅緑むなしきいろそ今もみえける

阿弥陀四十八願のこゝろを見侍けるに聞名見佛

皇太后宮大夫俊成女

秋風の嶺の雲はらふ夕暮のそらに月そ見えわたるや

發心のこゝろをよみ侍ける　　湛空上人

六の道いくめくりしてあひぬらん十念一にたすてぬちかひを

觀無量寿経説是語時無量寿佛住立空中　　蓮生法師

いれとりのよそにかけたる法のえをこゝろはかりにすまる月

十戒のなかに不自讃毀他

寂然法師

そのかみ河へをくだせハ父母のちりてつむ地とをそへけ

不偸盗戒　　　　　従三位行能

栽しをきあるしやなき櫻花ゆるしいはて家にはをらん

阿弥陀經六方護念のこゝろを

信生法師

をく露のたえぬしめりのもとよりに四方の時雨やこゝろそむらん

十界ことにうつる色を添けり

前大僧正慈鎮

さぬくにわくるかゝちりも海にハ一佛のさとりをたかりけり

前大僧正慈鎮四天王寺にて九品往生傳を繪

かきそへたるところを人々によませ給ける上品中生

入道前攝政左大臣

奇

あまりよのうちの蓮ハあらしまてやとる一よに花そひらくる

大日經心無所畏故能究竟淨菩提心のこゝろを

月によせて読侍ける

法印良守

秋のよハ心のくもりはれぬらんまことの月のさむよなりせ

佛の御前に侍て暁いたりて月をみてよみ侍ける

攝政前太政大臣

さしかゝる心の月ハ雲間よりいでしの暁そすみさはけの谷

影そらす

高弁上人

さりへ家我をハやミふゆよせていさくよ月のすミ侍らん
法印隆弁
うき世そのうきよのそらにはれてこそ雲井の月の影もみゆらん
前大僧正慈鎮
くもりなて法のひかりをてらさすは心のやミのはれぬ山のはの月
法務寛信
入ぬとも惜むは法の月影の名残はあまた残りてや世
法文百首の中に見仏のうちに菩薩清涼月遊於畢竟空のこゝろを
素覚法師
くもりなくむなしき空にすむ月にさへもるかけのよにやとるなりけり

仁王経の心を
選子内親王
たちかへて濁りはるれて絶ぬるもなかるゝ濁世にこそ有けれ
恒順衆生
うれしきもつらきもことにはなる身は人にまかせてふかゝりけり
我不知
赤染衛門
我もなし人もなしとおもひなはこの世のさかりかなしき
小野宮の家にまうでゝ仏のまへに懺法の読誦をき
をとこにはなくひてとゝろすみきれハよみえ侍るかな
康資王母
さらひとか我浮雲もなかれぬる月すむ水に影をやとして

上東門院にゆかりて後八講行はれける捧物
てうしてたてまつるとて

右近大将道綱母

こなたなる浪のすゑにはあらはれてそ蓮の露よりなりし

天王寺にまうでてよみ侍りける

前大僧正慈鎮

かねてより人の願ひをとめてや西むきにして契をきける

おなじ寺に詣でて

前太政大臣

ちかひける亀井の水を手にくみてむかしの契の末をたのまし

かの寺に戒師をしめてをくとてよみ侍りける

今更にいふことはいまし成りなるかなこの寺の人ならましかば

前大僧正慈鎮

天台座主になりて勧学講といふ事をとりおこなひ給ひける後につかはしける

後京極摂政前太政大臣

みちなるの光をのこしありのはすゑの山の道は絶えし

日吉十禅師宮によみてたてまつりける

前大僧正慈鎮

法におもひて世にありけさとをもふやとて人にかくらし

山の端にかかれるにめ心やそてみよそに雲をはらひ

古にて侍りて